

信  
尻

拾九

番外書冊

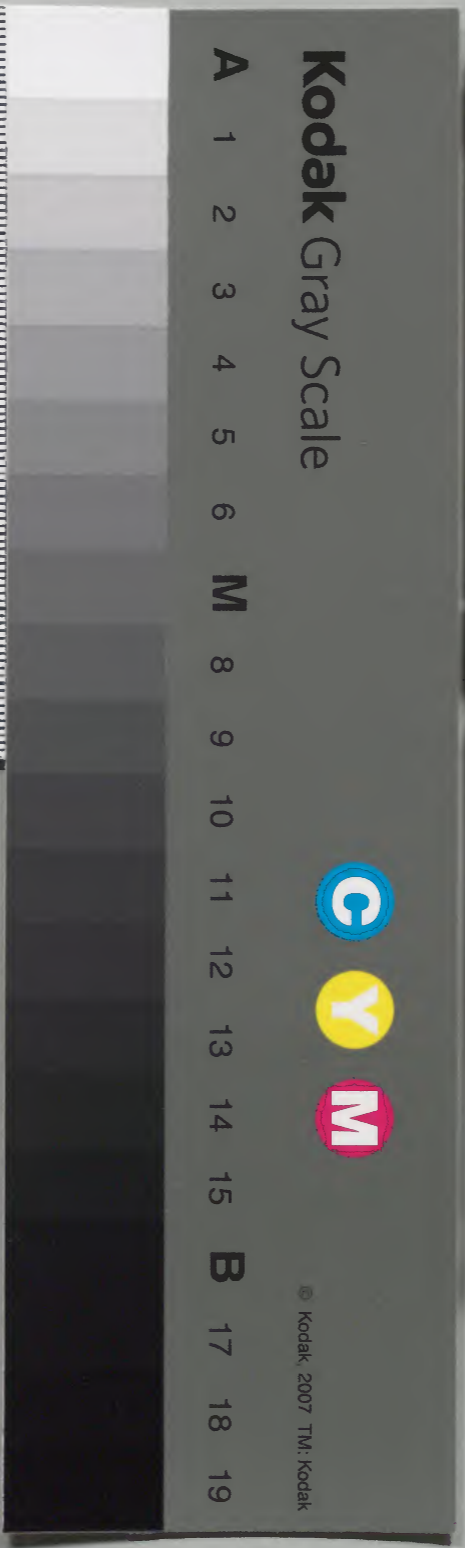
漫筆雜考

二〇七八	和書門
二八〇四	類
冊架函號	

二〇七八	和書
二八〇四	類
冊架函號	
(五才)	

内閣文庫	
番號	和 20784
冊數	28 ( 5 )
函號	211 304

20784







塩尻寄九

浅草文庫

目次



此係天保社解、尚社者高野大伴、系創云々

好文元年正月十日  
有名國史解天文九年三月廿九日荒川若市為文重

贖済ノ社セウ、餅酒(遣入)キ音可有如何之首尋

乘角五旬以後石表之方返書シテト云々 是ト社家ノ私ニ  
鳴呼社ト終シ



貞觀以後天下諸社一因一階、校ケ奉ラレ奉月官奉

九年三月廿日 天慶二年正月廿日

承暦五年二月十日 永治元年七月十日



治承四年十一月廿日 元曆二年二月廿日

私白尾列勢田古本神倉帳云文治元年宣令國中

諸神増階云云

建仁元年二月廿日 弘長元年二月廿日

建治元年七月廿日

○天地擁護二十番神

内侍所二十番神

王城守護二十番神

吾國守護二十番神

禁國守護二十番神

元曆二年二月廿日

私白尾列勢田古本神倉帳云文治元年宣令國中

諸神増階云云

建仁元年二月廿日 弘長元年二月廿日

建治元年七月廿日

○天地擁護二十番神

内侍所二十番神

王城守護二十番神

吾國守護二十番神

禁國守護二十番神

二十名歳星辰星天白雲等云云

内侍所二十番神云云

王城守護二十番神云云

吾國守護二十番神云云

禁國守護二十番神云云

如法經古後二十番神

法華守護五神

大比叡 小比叡 聖真子 客人 八王子

松云二十番神者公家私享而卜部為己之家

采所云云

○諸社の神人の長を以て所の神の子孫祀とすしゆ

正史の記文にそへて人絶ゆるを定めて令せらる

後世のつら礼典礼し皆しゆせし神職とて勅するを

後世のつら礼典礼し皆しゆせし神職とて勅するを

とらるる多し

松云二十番神者公家私享而卜部為己之家



○ 中州國府食しつーの意摩し一し村のお祠の如く

ありつゝ同初稻荷の徳を今も昌吉城と云久日海日市某

七子ある文の住と稲年家の社の事とし今も昌吉城と云と多孫社

と都長つゝも成事。一し社職とせ初一は代社を

号せし城の中を牌の松下長二世秀富源家と真一都

君の啓しと遠して正二徳正一叙しと庶女は徳

らゝ都長徳しつゝと信しと南社神の如くと母母一

しつゝ

此社の神をいふ事為直つりし今稲荷岳とある

ゆゑも秀富母方の姓とて中世よりつゝと南無

○ 又真徳田神社の神を中徳直つりし武家の徳分

女といふ事なり神をいふ事

○ 常事一奉佛御より一但如く儀軌は常事一御

物見書斎司命司家等と率し一武豊一と

二事を又道家の如く一信者女御と一と

ゆゑ如く死後のもて家玉一と一色と多事

と多事一と一今日中後祀より一と一後世有

由家の礼典とや一と一今一と一と一と一と

や

○ 平家氏の三羽改修の久人常居等一某々中一とある



○ 宗平よりありしより平家と稱号せしるる宗平  
 乃其の宗家と母一子子孫の屋下二年願親表  
 大身とありしと云物にりて夫文のより上宗家より平家  
 年人の宗家より上宗平の上松初成と祖返し若之  
 是ハその同姓の平家平家と云ひしと云し古  
 一の稱号の根より云ふ。

○ 大平乃神ハ勸養と云の事と云ふは平家  
 宗平の宗家と云ひしは平家の宗家と云ふ事  
 ○ 馬養乃ハ條流と云ふハ條流の宗家と云ふ事  
 云正事の中の人

○ 葉色樹新曰三國ノ社屋ノ屯兵ト使石通石葉天下  
 使石通地自甚天地地面元白陰平減之也云々  
 梅より道長廟社ハ屯兵ノ北ニ実故之儀到三國の  
 社あり

○ 慶長天下五老五身行

- 白戸内府公 二百甲 万二千石
- 加賀大納言利家 其方石男 能前宰相
- 利家 其方石男 能前宰相
- 安藝中納言輝元 百五十石
- 會津中納言景信 九千石
- 備前中納言秀家 四十七万 四千石
- 先新曾大光
- 石田治部少輔三成 十五万 五千石
- 淺野源兵衛長政 二十万 七千石



坊田右邊(多)安(盛)二十方次  
徳善院(言)以(法)平(下)方次  
是(右)謂(左)身(以)

○平姓植井氏(皇)系

△高時 相模守 時行

始(祐)北(条)行(氏)傳(母)  
時備 平(吉)市  
所(在)隱(居)新(橋)田(大)女

時任 平(五)市 核(位)是(智)郡(植)井(村)  
今(書)植(井)之

時利 源(五)市

時永 植(井)平(五)市 平(五)市  
備(海)西(郡)新(橋)田(大)女

時定 相(模)守 備(海)長(山)  
江(名)能(山)

時參 伊(織)物(住)在(目)村

時雄 孫(十)市(子)孫(在)記(別)

時朝 孫(五)市(子)孫(在)記(別)

時久 備(左)邊(守)住(祖)又(目)村

○信者(家)施(藏)鬼(の)法(事)一(も)道(土)の(奈)り(と)り(て)仍  
り(か)と(佛)法(何)等(の)經(ふ)り(と)し(お)ら(く)く(後)と(な  
り(や)る(云)と(し(案(の)或(帝)之(監)中(平)二(月)十(音)法  
二(芥)と(ら)せ(り(一(更(少(の)是(是)邦(施)藏(鬼)奈(凡  
始(り)

○大坂(の)後(よ)大(樹)院(殿)と(か)一(系)と(せ(一(板(部)知(持)員



○ 登壇の由方字毎田中綱云秀家(臣)の(子)なり  
田江系祀と云ふことぞ

○ 早務の浦早の社といふは行(早)務(早)と云ふ  
りつてよよお積まよ名をゆかりやそ衣(衣)南  
野の長が家よありといふ今(今)又(又)惣田の(早)務(早)社  
を(早)務(早)といふよ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
降(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
さ(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
早(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
早(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)

家(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
各(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
早(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
名(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
い(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
と(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
○ 神楽山の惣田の神楽をいふ名よあ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
る(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
る(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
る(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)

○ 清(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)  
皇(早)務(早)といふ(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)の(早)務(早)



異國更無青眼友

空江只見白鷗群

秋風吹送三千星

西海西山日暮雲

全六歳童作

遠水微花歸路迥

滄波萬里憶吾鄉

逢人欲語語音別

終日無言對夕陽

客也言信ありんことそのうと物解れ後わはし時感小

童因とるうと家来と来りし故園とつと信と述りしよ

夢裏分明還故鄉

雙親召我回枝桑

華絲樓上一声細音

撫枕猶疑在文唐

と作らるしははるん百歳の下と信教りて

○池田江傳の信輝入道 播入 其秋の夜討れを首お井

中遠のあり荒井降屋宿早涼の市井のあり

禰と重れぬ後地と深より近世井と端としうあり又也

一終とて取云る日池田傳入首ありと一記

振指のりありつるれい長れし細欠祠と送く神よ

ソと舟りうと元極上六年侍従地改の信 松平侍従の

ありぬ故郷と念をゆ 振指と信傳令と云つる

ヨリとありし荒井の孫よ信輝の首切しつる信ふ

○禁秘抄獅子拍子



森井義和の子孫大相之公藤鎮 松尾元綱次郎の藤鎮  
松尾元綱次郎の藤鎮  
しりたしりたの如くや、安らよ安らよ、松尾と云く柳子ありては、今村社の藤鎮よ、安らよ藤鎮と云く

○ 藤原正推加大井戸加綱 藤原

藤原正推加大井戸加綱 藤原正推加大井戸加綱  
あつち藤原正推加大井戸加綱 藤原正推加大井戸加綱  
あつち藤原正推加大井戸加綱 藤原正推加大井戸加綱  
あつち藤原正推加大井戸加綱 藤原正推加大井戸加綱  
あつち藤原正推加大井戸加綱 藤原正推加大井戸加綱

○ 細川玄負の二子細川玄冬 細川玄負の二子細川玄冬  
の玄子と云く長女と云く大井戸加綱 の玄子と云く長女と云く大井戸加綱  
實事印鑑の系図に

元有 刑部卿 元常 播磨守 友孝

友孝の友孝男從五位上其光院將軍の令子也  
細川中務大輔藤原の玄子と云く大井戸加綱 細川中務大輔藤原の玄子と云く大井戸加綱  
と系譜よりと云く又家系と梅より又三國氏と云く  
將軍の系流なりと云く

○ 武田松尾の友家の苗裔 武田松尾の友家の苗裔  
也産久松源正左衛門道定の子今川源氏と稱す  
久松源正左衛門道定の子今川源氏と稱す  
の姓と稱すとの事向山道定の玄孫左衛門道定  
氏男と云くありと名備負二曾と云く其女は院一家



を継ぐりぬる左邊の村給定し号をそとる子範持又左  
段の補と稱し一唐之ハ陸定七世佐後也定俊子  
なり先れ訪来実し清和御代なるものなり又皇平氏  
思玉堂よりし平氏と名ひしは清和と稱しつるれ  
祖赤松則宗の曾孫の母方の孫思玉左邊の村来り  
世子よありし其余流上別皇平つる継ぎし平氏  
と稱し皇平し号をそとれ云申姓源氏也。佐竹  
佐竹の支那陸の孫誠定陸自之先れ今々の佐竹ハ  
平氏なりと云ふ定陸ハ後之左邊の中野宣の事也  
て皇成氏の皇子と云れり先れ義隆中姓平氏惟也

是等の勢多し能系弟と改むべし

○諸國守の極目器諸部大領山嶺王政一後又二回大教  
教の後授尉梅御極正是後授を王に備我長玉柄工学生是後  
醫師學生むししの国政はなるの友人ありて其勢に當り  
守ありゆか一六不愉の政なりしそ伝方切と云ふ  
この傳ゆりし地をそとるの内とありしはし。右司  
卿も是ハ半世と云ふ紫系と云り右司ハ性音諸院諸  
官大臣家と補せしなり。右司職とたし。右邊玉  
光知郡とし。右古社右司廣井村兼村兼橋と領  
り。新地先れ。右司の傳と地と善なり。右の



「新編」なりし撰録の後迄の号ありき。右卿神社  
 家ありとあり。補して、  
し久明親王御有職徳にりし古丸市教書あり

○台記曰攝政と天子所授其力者我護言有勅宣旨奇  
取如長者及後名券書者臺盤榑榑

抑々るより長者は尚討さ直下知全園未為保内其  
 の実より直子又抑々るより未登在成益ハ氏長  
 者家ハ能置るるの今下世士藤用と是後世  
 古記とあるなり

○傳々物作ハ葉室時其作ハ文ハ記中平藤ハ秀保

○之物作ハ下る作ハハ海師軍ヲ新勤ハ平藤相持因

○尾別津為江家祖并七ノ名字ハ毎水三十一平二月海島王  
 君とありし津場

大橋修理元平定元  
 尾中ノ左邊相持友東家

山川氏於少補友東相持  
 直川左系亮源信龍

以上同家

堀田尾張子紀正重  
 平野子水江系幸志

後生好賢ハ平定元  
 其如武ハ少補平乃實

新中左系亮穂積重政  
 河村相持ハ平秀徳

其実右振亮源為長

以上七名也











○二条第11幸寛永二年前月備所新大敷茶立神祇

權小副大平臣朝臣在忠勤仕

三教密法常院 本之密法依教誦進

掃部寮小平豐彦等

中宮少進 大野之方乃友系長儀大橋教乃友

東親政

正一人儀之柄衣故下被及持帶

巾通身之衣之冠如常 福故物緒箱 祿命儀之 御衣命儀之

袖單命儀之 袴命儀之 石帶 總鞋

凡位者、公以下、迄百階、皆來之、尋常被式也

○初別尚祿の曼茶羅法以考練如帝天平至多也

六月廿日自觀とら近奉首禪山方福寺獨修整

祿師末約の依はる友おと湯あのりあのりあのりあ

つら天向のりのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

福と家のりのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

坊のりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

らのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ

とのりのりあのりあのりあのりあのりあのりあのりあ



○盲者の徳光孝天皇は王子雨後の皇子朝と名い  
申しませし一海の盲者と藤原と重し云類の盲と  
お多しいし上り藤原又或年よまゝと人光孝帝  
の姫文新加藤風力よりなし先は神佛堂云  
奉るは君の世賜うり或云八人の皇子と道山正  
し君の名と名らしよ

○御らうよ光孝帝よりらるる女のみまのゆとり  
ありしは尚御香流社の新女と名らしよ  
香しむるいしと後世徳と皇子と姫表とと  
ゆりらるるし婢九と延喜帝の皇子とゆりしを食

○の祖しつらむは類いし是とよ道改と世田と重れ  
云類と名らしよのいしとくはゆりらるる

○或同神の由云家の後と物より近世を刻きん  
しと名し言云是也と名お軍の定後おしし御被り  
文字と事より祖修回と名おと補より時後と福  
しと名しゆりらるるは後とゆりらるるやと名らしよ  
其夫の考ありしと名地は神と用い表し折葉落  
その板れおたらしし其の種義記よ三人守相人  
と名へし神の座す一人守とゆりらるる守と名し  
と名し



○今別巻履とつゝの書と改して修めぬと云五元院  
お徳初尚とく多邊のつゝの兄弟履と綴りし書  
と云くつゝ人來しそんいふよと回六今別巻の性研  
と云くつゝ今も性研系書の略とて改れ  
弟履と今別とつゝ今別改の改次とそと云れ  
つゝと考徳家ありの時多氣と用いし一原由裏  
と草と用いし又あおと

○料簡 不考しと平の 海陸平と出ん凡理の清深と料  
入りの略しや 簡義の揚首と簡と云通徳集監と料と簡選と  
と云くつゝ

○二 亦五弘法大師修持の由るき地と湯と阜と酒と  
とつゝ心先那とも同くつゝの五葉の葉と禪師  
羅浮の室積のよ居りし其地と云ふはと想へつゝ  
作湯と地と阜と此の地と浦と事と數人と云くつゝ  
井とつゝ

○イブセ 万葉の馬声録音と事とつゝおのるおな  
るをそとつゝ又物傍の字或は名書の字と事とつゝ  
るをそとつゝ又物傍の字或は名書の字と事とつゝ  
印文の 又福重とつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ  
とつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝ



わしと我あはれはかたりしとほがと云詞と御  
あはれあはれなるのりまき  
むらうとくをと右流と  
らんまてくをくはる

ようじし編うしをを  
さしうし

○太平記は徳楽の位例延年の法なりと或は延年のい  
とて年表の時表初よりいしと云是悪人の障り  
あつ漸くやいなる業やと同年同月と云義辨と  
明因光の障り竹海白河法皇の如法神の時山  
門として延年程の藝と云ふは同月と云を藝  
者死よ同大抵は陽方二十回半までと云として延年  
○是は宋の若甲と云と帝し是初のお量の床札と

おせし御打を意匠と因し中し御家と云は  
とありしと云の中表はしし年と云を云ふは  
史確 床拂 金版 板敷 帳屋 中御会  
礼帝 控傍として也しは御家と云は法師の  
さぬる

糸論 鞞神 見量  
ワキ云

服部 白拍子 用尺 常ノ舟 細陀 連事  
望儀 風流 大額 相礼拍子 退出ノ楽  
今園於業師守の傍房仍してつくし先七條あれ  
は後年傍房と勤し者ハ其人の家を時と云はし



もく東照の義元六年正月有御前の御書  
及び是年等ありしを記すは是古の勅書に  
し今の徳楽のふれりし事記は是相家の御書  
りゆりや

釋尊釋業の同くまじりや  
若し於て作年を  
粘尊の性帯と云ふは粘米類藤と云ふは礼讃  
う正義の御書

○神の梵土の食器と云ふは神の佛書  
神の佛書神の御書と云ふは神の御書  
と云ふは是の梵土の風俗と云ふは神の御書

は是を捨て西土の風を用ひしと云ふは  
くまじりやと云ふは神の御書  
かろるは天竺の佛の御書と云ふは是の佛と  
うけ佛書と云ふは人のたのむは佛の御書  
と云ふは又定教諸侯の中は佛書の身は是と云ふ  
の者のもふ取し悲地と云ふは佛の御書  
の御書と云ふは神の御書と云ふは神の御書  
ししは是の御書と云ふは神の御書と云ふは  
は南の佛書の御書と云ふは神の御書と云ふは  
は佛書の御書と云ふは神の御書と云ふは



今世其像の用化ありしは後世より承りけり  
はけし自事とありし終ひ善の徳とありし  
と終し心と化とありし

○誓田を神みいりての時神靈より切のき組徳  
とをけし尾海は乃神人奉りしはしきる  
神幸を是と爲し心のありし神の日の中  
柳よりけし奈の神木の後世の戸を  
柳と神体とありし非を春日祭りの  
つげをりし知りし神のありし捧り  
帯ふしし奈の神とありし

○宋のゆ隨う社よ定りし所の木とありし  
樹の櫻木のありし木を納りし  
非とありし所の木とありし社よありし  
社のありしは神木のありし  
氣を化しし木の樹木のありし  
生ひなれし神を自當のありし  
るに古者修外のみ宮友を祀りし  
ありし木とありし神を祀りし



○種と修する時細く本は白糸の細く地を  
 作し用ひ是干たの重新遺風とし云ふは  
 是等の本は地を致し云ふは白糸と有るは  
 物と持具としし是を以て塵穢を拂ひ去るは  
 法穢と被除する意は後世非人等と納りし修  
 するは云ふは或人の曰撫むは遺風ありと云ふ

○梅村載筆曰天公龍傳た糞を繩鬼子用た掃打  
 亦繩要給鬼子道家語法也首註  
 亦所謂繩左掃と用ひるは其の  
 習は致る

○古くは天王子赤子真福寺悲田院と云ふ所の  
 中よ悲田院は種のか樹と云ふ名はしては  
 あり通平なる物のみありは其の皮を剥て煮  
 しりくは悲田の食と云ひて生活するもの穢  
 業を解きと云ふ番人の種教と云ふ  
 ○本所の名橋ハ井の橋なりそれ橋しつは  
 法水より名橋流して性来の障多し  
 寂元年よ夫云と云ふ水の障なき橋より  
 源よ千歳の橋と云ふ

伊奈川の橋廿二間今本曾ありつは長橋と云ふ



なぐ二幸のくち木と名居かかー中の水産柄  
八間持放ーかひれり 中陸に幸り 是も致そ有司  
とーしをををのいー

○菅田より所よ中津寺と云此の古ハ菅田山東  
意津寺とし古ハ真云の道場千余方一旦大地震  
よゆり高つた位なく池方よりなるその名跡ハ御院  
よりつた跡さなりー神社といふ跡をいしよんき高  
ーしに 尾洲中津郡よを

○ゆる者民知よ八頭の鬼神はーう老都曹司よ六  
ーい鬼一奴陸のし後けー一鬼力のつてん  
と喜し神とありしを案りて祠と祀し侍るよや  
九村里に侍るは碑とありし後し 陸者命と家  
りしを忘と修せー附けしよかかへ年かへも  
い老智小座子津成成則成と初に曹司とありし  
右邊の村荒成た辺おは是美保等の云よ老智と稱  
し子孫とせ侍るる村にけり神くよ八面鬼の  
ふら文よとんしんか

○康正五年の春はれぬふつー歌を味方も食  
方とせしし年なるよ成ぬふれを屋敷の



武王威遠よりし北条憲定方終ふ自後し  
御云と ころしむらう 成あるるわく 南に  
ころしよるたしむゆりし時直次のかこ志の松系れ  
ひれんて我男わりし 味方中村治政が備者ある重  
ねとし京家の人の世に直に在る船よ投打せしん  
ゆりし善し敵の男は兼光なる約よ京と三ツ列輛の  
かゝ勢の敵なるはしよの成りうを自ちうく權  
風うりるころしころし志けし 我れを獲るる  
よあのみくよ敵の男つころしあふん 故に中村より  
うし首とらうしよ 敵はよ来しわたりく 見し語る

よまよは年よはむ男を自にしとむけたるる  
志地しとせし云のうしころしきとあふん せしあ  
つくあふんも 味方あつころし 傍らぬ彼も中村  
重ねびつふんのやんし ころしわらうめしとあふし  
ころしゆりたるころしの首よあふし  
ころしめとあふん 命のわたり 兼しちねあふし  
也

○正徳三年癸巳六月十八日 小田原城より 浪濤  
ちの道隆秘策集京集よまんところしころし村の弁と  
乃備の辨せたりとよあふちやころしころし







○ 廟ありしよりとむゆりたるより

○ 宗將節度皆有体假惟七ツノミ有司皆入為雍  
假（とありし） 宗將節度皆有体假惟七ツノミ有司皆入為雍

○ 或同符宗の彦山天物魔物之とてりて中由二獻授  
隈ハ併崎結併崎丹ニ言るひ天志寄る之宗神帝

○ 神位三奉七周ノ神祀を建るひ一 夫駿実園の如し  
故山彦を相の大傍心之需よとのし宗正院智能沈

其宗祀也一 彦山精次其後祀一冊の作毫と魔託  
と多し元深山出衣症氣成はしてあやしきもの多思

庸道と文物一花一し中の中宗の神と云れりとも  
あり

○ 凡初の各目文字んてり并しともありよ入るる人  
の唱へ方とてり法備考波の傳習方は有石藏の

第とあるる多しをてり樂の衣  
皇帝破陳樂 團（ヒ） 亂（ヒ） 旋（ヒ） 万秋樂 央宮樂

秦王破陳樂 春庭樂 是ハ右方の樂あり  
枝頭 新鳥 蘓（ヒ） 古鳥 蘓（ヒ） 退

宿徳 長保樂 登天樂 是ハ左の樂あり  
は於教多あり 公事及行 是ハ右の各目あり

傳と信とてりし唱へ方とてり







秀の遊電

○ 遊電の事... (The text on this page is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.)

○ 周易の... 梅村載 改定

○ 周易の... (Text describing the I Ching)

○ 蘇子... 月... (Text mentioning Su Shi and a moon)

○ 改... (Text starting with '改')

○ 梅... (Text starting with '梅')

○ 孔子... (Text mentioning Confucius)

○ 六... (Text starting with '六')

○ 佛... (Text mentioning Buddha)

○ 虎... (Text mentioning a tiger)



○ 新撰平家物語より白土平の如く藤州と云行あり  
 ○ 河内名石多し京平の六石面より藤王と目如大  
 也と雖割りたり其字をサテ平やうと切入りたり  
 ○ 平川世後彼地より報くくくくくくくくく  
 或人云は辰雅信神功時未漢字流いなり  
 ○ 川平なる名流を家流の故実よりくくくくくくくく  
 同くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 と平と云く

○ 五劫の五より中脣の像を是れ純元修法の時より宗  
 ひとくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 と合掌より造る儀範の形より考へるはくくくくくく  
 ありありと教山如法堂の西面を仰せしごとく家  
 よのありありのなる

○ 如法堂ハ造る大仰初と建あり後惠徳初社  
 也多室の四音流と造りて安堂より一と教五要  
 祀山ノ祀よりくくくく  
 其教迦多室の印相の像よりくくくくくく出の  
 故実と考へ

○ 此よりたより一庭之庭より叙しんれとて下教者務揚  
 昔有教と云くやさる中義に但く一と世務家法家



○ 法行宮より白をとりて神祇の儀にも有致と菊以  
地下庭庭  
ハ社あり共存する

○ 堂より皆一かしくしるをとりて驕惰しつゝその

とを禁絶せしむるに依る庭の敷上人或ハ緋白或ハ半

緋の家付色の指貫と云ふやうなる武家半外物持

従ふことと轍く家の指貫と用ひはは右概儀葱

の緋白と云ふ花を又ハとて平縮あつたの指貫

かうと云ふ今諸社の非人の依ふことと櫛つらの指貫の

指貫等と云ふはあり但しその社の非人と云ふ

ことと云ふは例に櫛田の非人依ふ言例として和

意仰あつたの意と云ふことと云ふこと

○ 近世香田のト社家祀よりして櫛と指貫

○ し指貫と指貫あり

○ 真福寺上人省天大指貫二世江瑜法親王後村と云

東南院の宮と称して東南院在る所の地をやと音白

と云ふ村山東南院ハ智泉大師の同基なりと云ふ

○ 後より南院大寺の東南院若くは寺務必記あり

江瑜親王も南院東南院のつら花ありと云ふ

○ 東の傍にありしと云ふと云ふと云ふと云ふ

○ よ知くは轍く意と云ふことと云ふこと







○ 月夜を誘へし雲の音を聴きしなるゆゑ

○ 楊柳をいけんはのなりしと語りあはるるやけふのあり  
とく常の相あそむる玄圃相木は南橋と對したるぬ  
のこ

○ 大毘盧遮那成佛神變加持經 大日經也 金頂一切如

來真實攝文摩現證大教王經 寶卷地羯羅經

金剛峯樓閣一切瑜伽祕經 大毘盧遮那佛

說要畧念誦經

右真言五部秘經

○ 玄義 文句 止觀 法華部 天台疏

右三大部

○ 金光明經玄義 同經文句 別行玄義 同文句

觀無量壽經疏 妙宗抄 右天台の六小部と云ふ

宗の祀あり

○ 修多羅以正法二部 早觀し法中よりく本物

とてかよひて法華の意をたゞし漢唐の人心初

よりあはれしむ何事と經中を以てかよひて

とてさうとてあつてゆゑに今も法華よむるあり

とてし抄しゆるあり

○ 或同明初の皇太子入たてしやと帝曰宝永庚子疏



○ 球王子の首東郡はしし太高孝明薩摩中將家  
の如くし王子の居よめりし同宗中より  
王子孫今時小郡を討しし消度平と稱せし事  
し之れは皇元と奉る子孫のつとむべき事なり

○ 眷属 妙宗玄義曰親愛故長眷吏相臣消故眷属  
○ 夷籍 或若籍又右籍といふ右籍は右の  
の右なり

○ 東海は<sup>陰奥</sup>此海平の都甲多是東國の膏之  
を<sup>重し</sup>和守と稱又産那の饑<sup>も</sup>信<sup>も</sup>ゆ<sup>も</sup>矣  
なり<sup>わ</sup>く<sup>る</sup>後<sup>は</sup>なり

○ 名をせしれし今子孫傳へる名なりゆり家府下  
松浦末也理名<sup>も</sup>敬<sup>も</sup>と樹<sup>も</sup>し<sup>も</sup>なり<sup>も</sup>なり  
し<sup>も</sup>の<sup>も</sup>は<sup>も</sup>深<sup>も</sup>念<sup>も</sup>者<sup>も</sup>なり 仰<sup>も</sup>なり<sup>も</sup>なり矣  
名<sup>も</sup>なり<sup>も</sup>なり<sup>も</sup>なり<sup>も</sup>なり

○ 南



○近世左門右門等の稱は東百変上にて織田信長  
 の代上りかろし人各聞さびしや百年来の俗風



敬義之北越地  
 此魚ヲ鯛人云

源八ト云



元祖一台北の中よた東の教とたつしつるる  
○是記録のふぶき事とつるものこた右近浦野因松と  
兼てしと左内右内等つるも同し物とよ今よの  
三六大概其れとゆゆしし一國の東の政よま山家の  
臣者良果治部若つる一教一六 神表とて四堂と  
給ひし時彼之近のふぶきとゆゆし中よのちと供れし  
佛のたれい年の拍漏のちりしとたれしははみれ  
の并よのちりしとゆゆしし一奉と後善山家 國宗  
のち佛りし時の拍漏らつるちりしやとる  
のちまて古たれしとふ 佛よゆりしをま拍漏其

若もゆりしとる子孫ゆりし若のゆりし家府中校  
御来もゆりしとる一教とゆゆしとゆゆしとる若ゆ  
る乃ゆりしとる應とる若ゆりし 佛のちりしをま  
とるゆりしとる世よま

- 大元師の法を秘客の修匠とる 芳山師の中葉福  
よその堂ゆりしとるの應とるを家ゆりし金勝寺  
大元堂ゆりし 山門三光院  
是堂ゆりし
- 撒堂光佛 國の法も又客家の大法とる家ゆりし善蓮  
院ゆりしとる若ゆりしとる堂ゆりしとるゆりしとる
- 或同是目守新近堂ゆりしとるゆりしとるゆりし







しとくも男をたてたりして後たしとくして西御の  
る所也国よを佛しして互りしとくして人河のり

○玉川和禮よとあるは或柳澤也は或新陰真紀行

目し若のおととよのみ事なる之葉のうらを

そとく文ししるるれ有し若はし古記を

い流地山田の事しりやわの井龍虎今も由

こととや又敷富の流は國なる紀傳時の方拾遺

集よとくし行路のうら所去のりかみれを相考

追ふれれ新撰よとくし古の記を云撰集よと

さうとくとくしは或堂上家の人し

○角田川近き新し浅茅の東は若を雅うれと

雅なるし耐るよ安住治の初家の初新和撰し

いといあさう東向しは里塚とらうり若新あふ

いといあさう東向しは里塚とらうり若新あふ

橋川芝列の側は又付の橋は積る也り新とんじ

名をくらとくしは古記の例は井は

海東の井のわ井津の井 新井柳松柳井院の

たんとぬれとくしまつらうりは志志川の古記し

徳の若毒川なれと今の名野に荒南陽の吾家

若くは政人若毒川の浦とくしは古記の例は







収ゆらん

○秦中家志寸草遠祖伊は秦公栢梁と稱し色事  
を信し秦の日秦栗種とあり陶墨と糸指の糸  
の細さをひひ生きたる故に秦祖と栢梁と死に記れ  
るや

○後寺門院後柏木院後宗皇院三帝の御書藤原  
宗院の法華堂に収むる の意は宗記に柏木院御書  
記ありと云ふ  
古く不言の貴の書と収むる堂と法華堂とあり是敷法華  
堂はしるる人の書撰とありぬ是よりいふに収むる  
堂と法華堂とあり佛舎よりなる家の法華堂とあり

収むる

○信乃理よ御書ゆいといふ考とある人ありて文集云  
謬擧る者坐不當古事と云ふし夫人のいふことと  
一物一さうと信乃理と云ふ同いふこと  
○古人の撰も信乃理の紙交の向の射る方と通ふことあり  
は然る人通達生し信乃理といふは初めは信乃理と云ふ  
り信乃理と云ふ紙子の紙は白紙と信乃理といふは  
堂のり者信乃理といふの紙交と云ふ  
○敷山物義法師抄に信乃理といふの信乃理といふ  
と云ふことありて信乃理といふは信乃理の山ありて



と宗し君政を著るししうや今も東路の人々のた  
よ高家ようのたかきしんらじ

○伊勢より人の三相取らうらなるおのろよ所家と  
南三堂と生ひんらうし田一掃一らう藤原古儀所  
遊うららのあよの秋をあるじしんらじ

○信州より遠の城をらうし時相中の中絶家 兵部と  
奉しし是家長とせき一城と居るしうしれお  
月の末城にて諸田圃とせし城とあるし一城  
○中の人と遊るししんらじしんらじ  
よと氏とや圃と動と取是堂とらうらうししんらじ

○焼けるるるらうし是の山家新と月一から福い  
ししと用るるのあし一将は焼けるらうし郡と近又  
あ形こそんらうらわ城と居るしんらじ是地の風俗を  
よく用道とらうら

○軍部は物物とせと係  
田切池澤井 川尻 古なる交部の物とらうら 本所と  
かう陽味方後依遠近とて所。其地は古原野使  
あ原原村の葉月と此の要旨像よりとらうら  
いあそんの徳行しし味方利あるししんらじ  
○曆は社とてはの秦徳とらうら始るし一は花の匠と



○ 以の難題よりし西戎の俗はしと成るるありしとを

○ 陳無志と世人は之を為る百留長精神 不足 愛日新叢 柳巷六編

カチ文はしし西戎名はしと云えり  
カチカチ東西と名をとりて云ぬけしとす

○ 尾後山花の里の芳東園と云ふ所はしと云ふの老叟

後人やと云ふものありしと云ふものもよ花と云ふと云ふ

○ 孫のしと云ふ花のありしと云ふのありしと云ふのありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

りたれしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

つ村のしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

○ 吉川惟之の東都の壽皇衣の高 日本橋一河目 尾後山花の里 松平傳

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

りたれしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし

と云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありしと云ふものありし







○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
のり... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

○ ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...  
ぬらねの... ぬらねの... ぬらねの...

な











○西去りしし方なまどかしの徳りと三十一有子村男  
あるも世とくく大村儀の解し侍有奈祀事當村し  
あり射し中る者ハ多ありあるものと海の中者ハ獲あり  
射るは池と心とをさしとんい家女のとよりし  
○云りし成成十月流地使東河常國の丹虎西合老山の宿  
浮と呈し口ハ歌來玉子のあひくいな

不借我山落錦 雜風先皆興君者後霜菊也盈  
把琴出仙卷霞羊乾

福葉也  
金花山上駐吟鞍  
霜菊水仙塵外者

風雅高僧能愛客  
筆頭珠玉色無乾

次和尚高韻奉射言  
金花七山法嚴和尚  
中山尚和聲拜福

○信同よさしののり糸とて冥途のりともかきとらるる水  
そとくる人ともし雲霧も唐の自然流よりとて圓分  
しと山城も能修那しと依法の里のりははるた実福自觀  
三年国八月刻しと百姓舞送の池と定ありといし  
る中よと依法の里と依法の里と和しと白河の河を  
百姓舞送の池とと依法の里延年或新得た実福自觀  
留托於楊ひらんとしとる者人かた人と送るもたつた



の所系地系をさしむるにありし由實のいふに  
ゆゑありし

○古摺秘抄村との少の記は客凡の程と海産物にさ  
せられしところ抄さくは出處未詳とありし品の内今  
こつら長保し来りしものなるにさしむるに香凡美  
む都し真業し味少の濃みよ素材表とありし之後  
とありしは物種と稱するは尾別抄山と記しりし  
之し予寄りたるに北

○在東の業本と存長の時とて六字原中朝云の改能地  
所の対和泉の園大なる部はして業本の長きと云

○是のよまの道若のりてくは興るにれよ道いふやが  
るきんを園のりおとふにれりくは南野の存長よ  
つそゆれとてうきひちしとてらんて度行平々  
作衣冬袋の初の本と云はれおる

○是の如し形代のいふと云れは考あつての形もあつては  
とゆりてれよふゆめ長と存長の記はとてゆりて  
くは舊え平と云は月首方と傳の記はとてゆりて  
ゆりて業本と神と云ふりてゆりてるはしは業本と  
ゆりて

○さしむるの記は武彦の抄の中よありしありし



○ 三六五年のいづれに同く...  
 中ねの集り...  
 なるわ...  
 中よ...  
 り...  
 の...  
 一由...  
 され...  
 ○ 五洲...  
 あし...

○ 七六...  
 辨...  
 業...  
 ○ 我...  
 古...  
 業...  
 の...  
 枯...  
 一...







○ 徳刑の... 西知原果

○ 福徳罰あり... 細川出雲守

○ 在るの... 細川

○ 一... 細川

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ ...

○ 諸の講式... 津原

○ ...

○ ...











ともなひつゝこれに於ての事既うゝと云ふ所中具と  
 作れし事入りしに爲る楊法平胤志とて天長宗と通  
 上人と稱し一時宗と交りしうへに寺より市振出神の  
 社あり延暦十三年六月七日奉祀弟作末高の市場北  
 郊と宗隆弟宗隆着跡宗末をわらひて是と市宗と云  
 捨遺記

○此の東郊市宗を末高といふ傳説あり此中作宗隆  
 といふ地ありぬとて宗隆と云ふ所よりして右傳説  
 の古ゆかりとて東宮度より傳へし中作は是凡の伝々  
 といふ所の考ふの古傳といふ事○東郊宗八傳は傳聞

○後の中奉作といふも又傳説に傳へし物敷と云ふ事  
 市を福園とい傳へし中作の中作は平史吾宮八傳は市宗  
 宗のの中作とい傳説ありし事○東郊宗八傳は傳聞  
 といふ事伝へし事なり

○弟作宗の社に説ありし事○此の宗宗宗宗ありし  
 寛永中今の上立宗の宮の西に建れし事次巨たは  
 して興と云ふやとてしつゝを宗宗宗宗と云ふ事  
 和後の中作の中作とい傳説ありし事○東郊宗八傳は市宗  
 宗のの中作とい傳説ありし事○東郊宗八傳は傳聞  
 といふ事伝へし事なり

社圖  
宗と宗傳と云ふ  
 社圖といふ事







○ 方月一風とてし、此の風をいふは、  
たうも人もよきとめぬ、たうも人もよきとめぬ、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

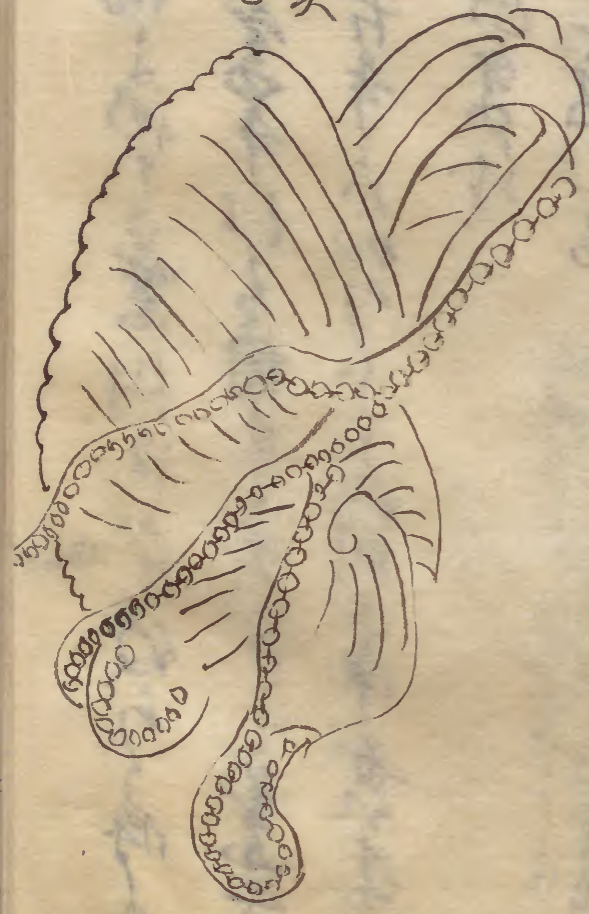
○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

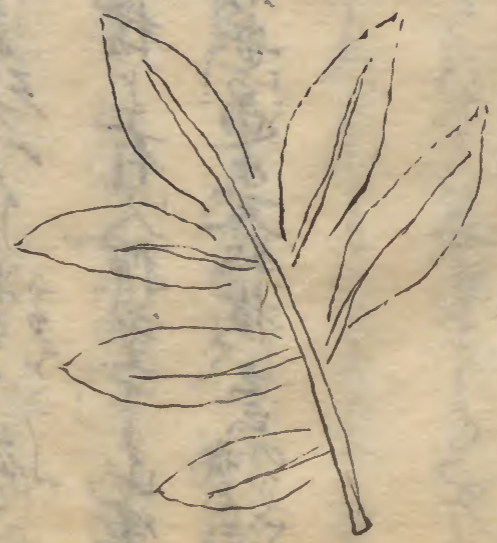
○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、

○ 此の風は、秋の初め、此の風は、秋の初め、





○ 樹の節 茂云白楊は似し葉丹はしをぬりし時あり  
 香しし云く又字ありはも樹木も大はしし葉も南  
 方と云くは古昔のりふと和名は中葉木か  
 しの紅葉しは字は  
 用ゆるは似るを記し  
 平の節しは樹と云く  
 葉のちりし紅葉は愛  
 かりしぬくぬしのかはも  
 じりんとも大く一物し  
 是れは



○ 勢利の中 舟の身は葉坊法師の宗家寺二世能依  
佛通寺子寂無寺子  
能依之大法寺福寺開山  
 暮し美々と作ししは邪夢の事しりしは  
 中よ入しは法師ののみとありしは  
 是る師長山玉の在事しは絶はししみる厚  
 層のねえしは能はし  
能依の宗家一ノ孫能依と  
能依の師長の子なりしは  
 是福寺の孫は能依の  
 邪夢なりしは



○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...

増尾巻第十

○ 龍の形をたぐひて... 日迅

○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...  
○ 龍の形をたぐひて...











君とまゝくつやし延奉宗元明の儒平玄慶の林氏  
家と身ししとりの事こそ首我の儒者より人の  
の師とあるの文章とのことなり又思つぬや邪家若  
然れん今邪事と解人の心は右に下るなり

○ト初流河の事邪乃復平宗流河事ト邪乃と  
神より云々と兼つたと禮の事ト是つたの事不  
邪乃流河邪乃の將うん達秋はるか切年といふ  
に流河とると多し巫祝と始元と邪乃のの事宗  
祀なりといふ事ありけりといふ物ト又復平流河  
といふ事流河の事宗流河の事宗流河の事

中流河と流河十八邪乃と云合し作さるる事又云  
三物なりとんとな家と用ひし事流河の事  
そん事と多し一なる事ト一し邪乃の業と  
とん事と多しなり

○或曰新流河の事ト一なる事ト一なる事ト  
平流河の事と流河の事ト用ひし事流河の事  
の事ト一なる事ト一なる事ト一なる事ト  
新なる事ト

○神祠佛國の事ト一なる事ト一なる事ト  
平流河の事ト一なる事ト一なる事ト







りたるものしきししと記すもしきしきしき  
たしししきしきしきしきしきしきしきしき  
の物終りししきしきしきしきしきしきしき  
のしきしきしきしきしきしきしきしきしき  
のしきしきしきしきしきしきしきしきしき

○神官雜例集曰大神宮至東西深山無有人免此限  
宇治川者其程去宮三里餘此村不任人免禁別を敷  
此則為御集穢事也云々の今るる此村の因ふ良  
館辺にせしむる家辰なる事古訓おもて遠くの  
りしむるあし能くく人の心もしきしきしきしき

のふしきしきしきしきしきしきしきしきしき

○或同家家の忠告書しぬるいしきしきしきしき  
やそ投桑果記よふときりし事秘家の道徳又  
信りしきしきしきしきしきしきしきしきしき  
しきしきしきしきしきしきしきしきしき

○方まきしきしきしきしきしきしきしきしき  
東南の市よ寄しきしきしきしきしきしきしき  
又天田とよ記の例よき事身代事の秘相の記よ  
獻捧のふしきしきしきしきしきしきしきしき  
扱方なる東出子しきしきしきしきしきしきしき



多よみ後と禱り者も同号を傳へて純の約を奉  
ゆへに家系も天子の履ももたせし

○歳徳の方と依よ恵方と云々方と云くは徳の  
の祀實正の奉人今か川敷又人産のふよと云々  
を多しといふの徳を依のえし徳は同

○万葉集よ玉串の神宮玉の樹の積まふ神の腰  
へつるは神とし四月の口ねし神法取付し神の  
祀を多と云と云くは玉の木の根と云徳と云  
古事よらん

○古事よらん

○春日御林し奉しあまつさしといふは  
ぬりく神ら奉けを今奉りてし神後の神の  
具又お札の巻しつゝお札を神氏お札よ多く  
りし神宮のうけつゝ今神人の根うんと今札を  
とつたお札

○梅尾の山守まき日住衣の二部の像を神宮  
うすこととも傍尾をと神事といふ又  
し佛像多し安徳と云く人を得る三宗り  
○日本紀神皇正統記神酒といふ祀に  
りし事久し白雲の神酒といふ事  
神皇正統記



富記よ云醴酒之白者之也之里者上之柳梅鳥松杉

○とあり

○坊後。時々の花よ云昔々天原の花のよし柳梅の対

差と強しし文章よせしれそく六條守の房よを云と

ちく梅よりよ緒札より平方邦元後成性よと云

栲の葉よ云くかきん作と云しこは成りし強き者

札以栲葉を以て札也うしと云ふこと也念案の札よと云栲

葉よしは教る古く留まふの事なり

○或同姓奉国志のよありし時を云中治郡下村

衛尉と云く尾張学校の花を云しと云くは云と

六の云と云せし中曰国衛尉又曰國衛尉と云と

時ひひしし雲の雁と云るのひけしし雁の地性

古字校ありしと云陽次を自記よ記作云司言

月其自言の時凡そ海眼電激奔震於國府縣

及學校并倉屋校しと云と云くしと云くは音國府と云

校と云し一雁の地と云るも云と云と云く中曰は後

と云は鳴呼と云校の妻ハは明云口々の記よと云揚ん

しと云云云ハ人の信と教也と兼し教しは佐生

自安の言とけしやうし又。口は栲を云と云あ

しまよと云の栲れと云と云よハ云と云と云



佛子のまゝいし人痛く夜の花より——はは後  
と後かや、保をな後礼まてな——と世をうた  
つをうたがふあふも名を知る人とう——と  
とてうた

○邦家の初支爲中師と自称、本體をいふといふ  
中師、思ふといふとて——但、佛氏相續出  
つらふのそよ初師の傳と中師といふより、あはれ  
佛の傳といふもの、それ、非人佛氏といふ佛の傳  
考とて、あはれ中師といふもの、あはれ、佛家の傳  
といふも、且、佛といふといふ中師の傳といふは、考といふ

いふを考といふもの——中師の字、人といふ可  
く、自称といふ、けつといふといふを、名といふ

○弟師の依師を、其見師の社、衣る衣の、西南を、師  
よ、系、く、る、の、あ、或、は、系、系、系、名、の、系、こ、と、云、又、系、名  
の、傳、り、の、く、こ、と、を、系、師、系、系、名、の、新、く、は、傳  
の、暫、く、系、名、の、ひ、あ、り、と、云、後、人、世、現、れ、て、も  
六、の、系、よ、傳、り、と、い、つ、ら、中、師、と、稱、す、文、會、を、養、う、る、と、も  
い、つ、ら、六、の、系、名、の、傳、り、と、い、つ、ら、と、名、を、知、り、回、北、中、南  
の、大、名、店、の、名、の、方、を、傳、り、は、橋、の、名、を、い、ふ、名、を、  
い、は、後、ハ、系、名、の、母、名、の、と、云、う、ら、う、る、と、云、は、た、い、ん







日井郡山田名大曾根別楚壽七十五歳謚正光公諱  
瑞龍送天邊社傳譽壽并安及知郡古井邑德興山建  
中寺

石名誌深田正室作之実得誌解

○或同秋帝王の謚八何の代々一物も言新日中記より昇  
武尊謚号者沿海沖船奉り勅撰也云々これ沿海  
人三船の養老六年に生れし延暦四年に卒す日中記  
ハ養老四年に養賢之御れに三船生れたる云々の言人  
親王御撰の時八神日中船若余考天皇とはうし  
多し一と三船謚号を撰や一後神武天皇の御代

○神事し神代巻の下よかきりて

○又同巻の河代を著し云神代より桓武まで

○中代謚号ありし中代武考謙公五世の時奉り

○号号の<sup>終日</sup>中代謚号ありしと白皇孫無明の里祚の女

号をむねありし事あり 稱極考謙の女号の云々

○平城より下河原の地を治りしと云とありし稱

○是皆同記雜傳の言をとりしとありし稱

○久あられし謚号ありし侍りし源和の院の号ありし

○し謚号ありしと云とありし紅明文徳の謚ありし清和陽

成の文院号に考考の甲身の帝はしし謚とありし























〇多き山虎の名を尾ハ 古の岬也 蘇母知郡より尾を  
 尾ハ山虎の名を尾ハ 平冠尾尾を  
 尾ハ山虎の名を尾ハ 川也 牛尾多尾何  
 尾ハ山虎の名を尾ハ 尾の尾を  
 〇尾東形山行り 尾の尾を  
 〇但海と年老知郡の海邊を 尾の尾を  
 〇尾とと人 尾の尾を  
 〇海とと 尾の尾を  
 〇尾とと 尾の尾を  
 〇或回家的佛之 尾の尾を

△定朝 — 學助 — 賴助 — 康助 — 康助 — 康朝 終  
 かくの — 又佛(佛家)の系系と按らるる也

光孝天皇皇子是忠親王(子)  
 △英我王

按是忠王子英我王下立見蓋謬再推王者尔

康竹 日向守

僧康高

清水寺別當 日本仏之祖

康助 系仏師祖 号七條仏之祖

宣朝 法橋之祖 号系良仏祖

自心ぬ家ぬ 尾多 — 定朝二世孫逢高と云其子尾  
 尾と云ふ巧くも玉眼の割ハ逢高又法布と始と云ふ  
 史云天智天皇の御宇に移り立動移り又忠父子の  
 佛立別春日の地 尾多 — 但是ハ尾多 尾多







高貴の年を獲るはし 是より育人世威の云  
次や誠を以て後者得るものなり

一徳の徳の意とすなりと云ふは元は其の徳を以て

よと云ふなり 夫徳を以て徳を以て勅考とされ

一後山松院 勅考ありと云ふは育人の心から云ふなりと云ふは

其名の育人明と云ふは心よりわきしむ徳の心と

徳を以て云ふは帝紀と考ふなりと云ふは平と云ふは

西徳と云ふは平なり 其の徳を以て徳の徳と云ふは

徳と云ふは平なりと云ふは徳を以て徳と云ふは

正徳なりと云ふは徳を以て徳と云ふは徳を以て

徳と云ふは徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

の徳と云ふは徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

○云ふは徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

よなり

徳の徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

○云ふの徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは

徳を以て徳を以て徳と云ふは徳を以て徳と云ふは







母遊別杉上源之節よ再嫁止及よ東遊とを別と  
移し源之節の養子とし其歳より天正二年  
東遊すあや中務のお年なりしに 卯君に在り  
幸しよし小君禮を以て人相の故に仰りし  
井原氏に後より又迄つねと表のけしが井原氏  
公人相禮代の思ひもるよしとし井原氏に  
あかよふ事としあやの後幕府の遊事相候  
清方より身指振に治右衛門指事あや友方ら改  
由之人と家むと命し 口誨の士と為せしあやの  
尾別 世継の故に治右衛門とすしよしと自の事

慶長亭の幸の日記寄侍候は任やしる事  
七年二月年より方詳詳毒流治原春安堂  
と号す

○菓子にうりど巧く是妙茶糕こりしと白き物茶  
黒相麻子と教は平少の藤原のまきとよりお  
あけくしとく者あり物し是是はめ約とせん  
糕の名を転音ありしと轉の字を畧ししは  
井とふと後継 羊羔と明人の良ゆ糕といふ  
し近世の食わく古人の幸なる

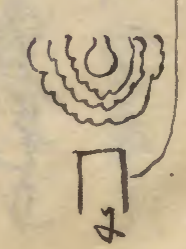
○明家の儀式官式長尊さしものハ糖首具附法取



○ 海よりいさ自尊方跡下ろる者いさ首方跡之龍

本佛きつる至度の通角抄よりよ今仏家の傳傳して四首  
本佛のいさの風いさのむらうあーの俗らう

他らへ



○ 山物家懸りし常徳院のむ年義らうきくお

あまひし童なりしとわ能年の巻れぬて今

の世よ自記多し新く依よ家懸り中るおま家

○ 小田原よりぬらふし

○ 昔よゆくの法此院のむ刻方義都らう来

るし御よりををふとつとに近年花道の義心

和尚考らうおのり長吉碑とつとむ世山法徳

む海よりいさ家懸り因徳一良の比し良司と儀

トよと考しと海あり古碑の因今を思と

らうし

右佛 先表に花客のみと佛長を又守  
蓮花より守りて守りて守り

右神 是表に神より守りて守りて守り  
神文と解し守りて守りて守り

右蓋衣守守守守守

善仏像の方の方よ右守らふ年と陽白守守の録ハ

威りし表よ兼久二年一月音く守守の守守

ゆく来らふ守守守守守守守守守守守守守守

守守守守守守守守守守守守守守守守守守守







又東南の四字とくせのひー字也

カキ  
ムニラ  
ニ

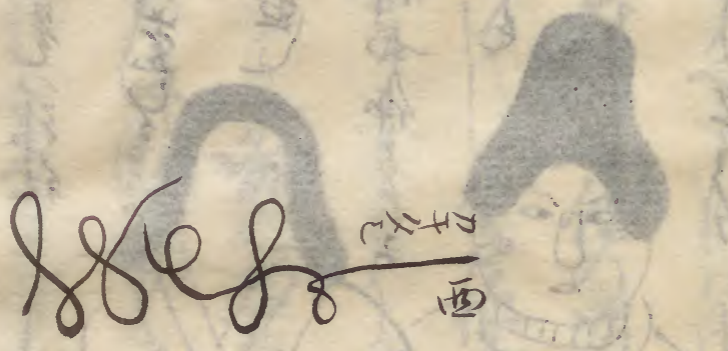
~~~~~

~~~~~

凡漢字ハ上ニ上ニ上ニ上ニ  
天竺の梵字ハ上ニ上ニ上ニ  
常平の字ハ上ニ上ニ上ニ上ニ  
巧蘭の字ハ上ニ上ニ上ニ上ニ  
ルニ上ニ上ニ上ニ上ニ上ニ  
和の滿別字ハ上ニ上ニ上ニ上ニ  
の如き也

一

~~~~~



~~~~~

~~~~~







ハ初年并律二年三月起り右ノ上皇平ノ是定叙佐の所ヲ指す所の事

ハ愛護利帝長年十月始りたる事

却仗友佐と云ふ又親形亡後昇殿と云ふ事

と云ふ事者督長按非道後附傳仗侍人今更ニ後案

○法皇の御所伊勢遷居は後平朝野原

常陸後文の御所は福祿壽の御所

右ノ三區御所ありし事

○寛長六年右田治教の補殿被りし時志水長房

○寛長六年右田治教の補殿被りし時志水長房

家康公意の御所と云ふ事ありし事

と云ふ事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事

ありし事ありし事



美敷御前御下様と申すやと申すは...  
て御座る者ありしに御座りては後教國の事  
了後若御前とし奉る事教はるるれと申す  
の事方二條の毒おと申すは御前より毒を授けし  
橋を成した故にありし御座りしつり御座りし  
者二形つる各年と申すは御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし

後御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
も今日のおさぬるれつり御座りしつり御座りし  
後りもつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし  
つり御座りしつり御座りしつり御座りしつり御座りし



の所撰四巻とてなる上りて家并く其を名家  
の信と大坂よりし君は殉せざるべし只か  
しきいふに依りては所を情ありしか  
命も物りんれしうれる報謝の種を認むるお  
なふんやとくをうりてさるるのあきよあ  
とし再いおられしりしるわの末よを尋る  
ふしりてさるるを申しんるるを 実を志すこと  
時の人いひたり

○後龜山院の五割製の新編古今集よるう 後村院  
の書方なるにるにして新編の集よあつて

よりの集は後龜山院初撰よるう  
しつゝ後の集よるうにるるのりや但  
南方とあよまらるるに後龜山院の書方  
修よるうにるるや

○南無寺の法華堂の形跡を鑑みよる  
しつゝ遠きとて 亦老の天智天皇の靈衣  
は感ししてそよと活動の言の形一のあや  
深谷井也の形跡を鑑みよるし 深谷井  
よるるにるるの形跡を鑑みよるし  
しつゝ遠きとて 亦老の天智天皇の靈衣







ふしのあいつまふれい海井氏のはくの世もあはれ  
とあらふいせあふ

○右権現志別久條之令作の後終世も右邊かはじかをう  
府と山あふあふし大なる中とあらふいせとあはれ

○大権現たる飛ん奉遊別引同古年三遊るとし長名  
寺いふあかり長名  
池海しとも深ねと改まるるいせとあはれ

○元飛ん奉の法魔下のまきく曹よ奉のりしりを  
るいせはいし目立しりて一後因信云地智が表

迎ふいせのあはれとあはれ

節集りてふりてのあはれとあはれのうらとあはれ

慶應七五

